

中学生のスポーツクラブへの加入に関する研究

藤原 誠 堺 賢治¹⁾

A study on the participation in sports club of junior high school student

Makoto Fujiwara and Kenji Sakai¹

Key words : junior high school student, sports club, participation, dropout

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education,
Ehime University, 4, 29-38, March, 2003)

キーワード：中学生 スポーツクラブ 加入 離脱

I 緒 言

平成12年9月13日に文部省より出された「スポーツ振興基本計画」において、生涯スポーツ社会の実現が唱われているように、今や生涯にわたるスポーツの実施は、人々の健康で豊かな生活を実現する上で極めて重要なものであるという認識が定着してきた。「国民の誰もが、それぞれの体力や年齢、技術、興味・目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会を実現する」という政策目標が設定され、「できるかぎり早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が2人に1人(50%)となること」が目指されているのである⁸⁾。

このような生涯スポーツ社会の実現のためには、スポーツ施設や指導者、スポーツ組織など、スポーツの実施に関わる環境を整えることも必要となるが、それにも増して、子どもの頃からスポーツに親しみ、スポーツの良さを体感することにより、継続的にスポーツを実施したいという内的な欲求を創出することが必要となろう。

小学生を主なメンバーとしているスポーツ少年団への登録団員数は少子化の影響もあり減少傾向にあり、中学校の運動部の登録率も大半の種目で減少傾向にあることが指摘されている⁹⁾。さらに、その活動の状況については、おとなの管理のもとで勝利追求を主な目

的とする活動となる傾向がみうけられ、スポーツ障害、バーンアウト、ドロップアウトなど、子どもの体と心にひずみを生じさせている¹⁾⁵⁾⁷⁾⁹⁾¹⁰⁾。これらの問題状況は子どもの継続的なスポーツの実施を阻害することになっている。

著者はこれまで、小学生を研究対象として子どものスポーツの実情について調査研究を行ってきたが²⁾³⁾¹⁾、次の段階として、中学生のスポーツ実施の状況や、小学校から中学校への進学を契機に、運動部等のスポーツクラブへの加入に対して、子どもたちがどのような選択を行っているのかという、小学校から中学校への継続という観点からの研究が必要になると思われる。

中学生のスポーツクラブへの加入や離脱の状況、さらに、スポーツクラブの活動の実態について把握することは、中学校期というライフステージにおけるスポーツ実施の実情把握としても意味のあることである。

そこで、本研究では、中学生のスポーツクラブへの加入状況やスポーツクラブでの活動状況を明らかにすること、さらに、中学校期のスポーツクラブへの加入状況と小学校期のスポーツ実施との関係について検討することを目的とした。

II 方 法

1. 調査対象

1) 愛媛大学教育学部
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,
Japan

愛媛県松山市の中学1年生、1,038名を調査対象とした。

2. 調査方法

質問紙による配票調査を実施した。有効回収数は785、有効回収率は75.6%であった。

3. 調査時期

2001年10月下旬から11月上旬にかけて調査を実施した。

4. 分析の視点

中学校期のスポーツクラブへの加入・離脱の状況は表1のとおりである。スポーツクラブへの加入者は554名(70.6%)、一度加入したが離脱した者は52名(6.6%)、加入したことがない者は179名(22.8%)であった。離脱については、入学から約半年が経過した時点での離脱状況ということになる。この時期は、スポーツクラブに加入し、ある程度活動した結果として、クラブ加入の継続や離脱の選択がある程度落ち着く時期であると思われる。この時期以後にも離脱は起こってくるが、今回は、この時点での離脱についてのみ扱うことになる。

以下では、スポーツクラブへの加入者をA群、一度加入したが離脱した者をB群、加入したことがない者をC群として分析を進める。

中学校期のスポーツクラブへの加入についてはA群、B群、C群を比較しながら分析を行う。中学校期の活動状況については、A群とB群を比較しながらスポーツクラブからの離脱の要因の検討を含めながら活動の実態を明らかにする。さらに、中学校でのスポーツクラブへの加入状況と小学校期のスポーツ実施状況との関係については、A群、B群、C群を比較しながら分析を行う。

表1 加入状況

項目	実数	%
加入	554	70.6
離脱	52	6.6
非加入	179	22.8

Ⅲ 結果と考察

1. スポーツクラブへの加入

(1) 性別

中学でのスポーツクラブへの加入状況と性別との

関係を示したものが表2である。A群では男子が65.1%を占め、B群、C群に比べて男子の比率が高くなっている。これに対して、女子の比率はC群で76.5%、B群でも59.6%を占めており、A群の34.9%を大きく上回っている。

中学校期にスポーツクラブへ加入している者は女子より男子が多く、非加入の者では女子が多くなっている。スポーツクラブを離脱した者においても男子より女子が多くなっている。中学校期のスポーツクラブへの加入については、男子の方が積極的であり、女子は加入しない者が多い傾向にあり、加えても離脱してしまう者が多い傾向にあるといえよう。

表2 性別

項目	分類			合計
	A	B	C	
男	65.1	40.4	23.5	53.9
女	34.9	59.6	76.5	46.1

p<0.001

(χ^2 検定による)

(2) スポーツ意識

運動やスポーツをすることについて好きかどうか尋ねた結果は表3の通りである。A群ではB群、C群に比較して「好き」であると回答した者が極めて多く、7割近くを占めている。これに対して、「どちらかといえば嫌い」、あるいは「嫌い」と回答した者はB群やC群で多くなっている。スポーツクラブへの加入者は運動やスポーツをすることが好きだから加入したという様子がうかがえる。他方、離脱者では運動やスポーツをすることが「どちらかといえば嫌い」、あるいは「嫌い」と回答した者が25.0%おり、運動やスポーツをすることが好きでもないのに何らかの理由により加入したが、やはりやめてしまったという者がかなりいることがわかる。スポーツの継続的な実施にはスポーツが好きであるという、スポーツに対する基本的な感情が関係していることがうかがえる。

表3 運動やスポーツに対する意識

項目	分類			合計
	A	B	C	
好き	68.1	30.8	20.1	54.7
どちらかといえば好き	24.4	44.2	41.9	29.7
どちらかといえば嫌い	6.1	11.5	19.0	9.4
嫌い	1.4	13.5	19.0	6.2

p<0.001

スポーツをするうえで何が大切だと思うかという質問に対する回答は表4のようになった。全体的にみると、「一生懸命やること」や「楽しくやること」をあげる者が多くなっている。各群を比較すると、A群ではB群やC群に比べて「勝つこと」が大切だとする者が多くなっている。これに対して、「楽しくやること」が大切だとする者は、A群よりB群やC群の方が多くなっている。このことから、スポーツクラブへの加入者は離脱者や非加入者より、スポーツを実施する際に勝利の追求を重視する傾向にあり、離脱者や非加入者は加入者よりスポーツ実施の楽しさを重視する傾向が強いことがうかがえる。

表4 大切なこと (%)

項目	分類	A	B	C	合計
勝つこと		18.2	1.9	4.5	14.0
一生懸命やること		44.5	34.6	28.5	40.1
楽しくやること		30.3	48.1	52.5	36.6
考えたことがない		7.0	15.4	14.5	9.3

p<0.001

2. スポーツクラブの活動状況

以下では、中学校期にスポーツクラブの活動経験のあるA群およびB群に限定して、その活動状況について検討する。

(1) 加入のきっかけ

スポーツクラブへの加入のきっかけについてまとめたものが表5である。全体としては、自分がやりたくて加入したという者が多い。これに次いで、友達にさそわれた、親にすすめられたという順になっている。両群を比較すると、A群ではB群に比べて自分がやりたくて加入したという者が多く、友達にさそわれたり、親にすすめられたので加入したという者は少ない。このように、スポーツクラブへ加入して継続的に活動を実施している者では自分の意志により加入を決定した者が多く、離脱者では他者の誘いや他者のすすめで加入を決定した者が多くなっている。

表5 加入のきっかけ (%)

項目	分類	A	B	合計
自分がやりたくて		73.9	50.0	71.9
友達にさそわれた		13.4	30.0	14.8
親にすすめられた		7.4	12.0	7.8
先生や指導者にすすめられた		1.3	2.0	1.3
その他		4.0	6.0	4.2

p<0.01

(2) 活動日数

加入しているスポーツクラブの活動日数についてまとめると表6のようになる。全体では、ほぼ9割の者が週に5日以上活動しており、そのうちの約半数の者は毎日活動しているという状況である。スポーツクラブに加入している中学生にとって、スポーツクラブでの活動は生活における主要側面の一つとして位置づいていることがわかる。

A群とB群の比較では、両群にほとんど差はみられない。加入者が活動しているスポーツクラブと離脱者が加入していたスポーツクラブの活動日数には違いがないということがわかる。

表6 活動日数 (%)

項目	分類	A	B	合計
週に1~4日		5.6	8.0	5.8
週に5~6日		45.3	38.0	44.7
毎日		44.2	44.0	44.2
その他		4.9	10.0	5.3

n.s.

(3) 練習時間

スポーツクラブにおける平日の練習時間は表7の通りである。全体としては、2時間未満のところが多くなる。次いで、2時間以上3時間未満のところは32.7%となっている。平日は放課後の限られた時間に活動することになるので、2時間未満のところが多くなっているものと思われる。

A群とB群を比較すると、A群では2時間未満の者が59.8%を占めて最も多くなっているのに対して、B群では2時間以上3時間未満の者が49.0%を占めて最も多くなっている。スポーツクラブを離脱した者では継続して活動を実施している者に比べて、平日の練習時間が長くなっており、練習による時間的負担や、それに伴う身体的負担等が大きかっ

たことが想像される。

表7 練習時間 (%)

項目	分類	A	B	合計
2時間未満		59.8	28.6	57.2
2時間以上3時間未満		31.3	49.0	32.7
3時間以上		8.2	16.3	8.9
活動がない		0.7	6.1	1.2

p<0.001

(4) 技能レベル

加入しているスポーツクラブにおいて、同学年のクラブ員と比較したとき、自分の技能レベルがどの程度であるか尋ねると、表8のようになった。

同学年のクラブ員の中で、技能レベルが上位となる「うまい方」、あるいは「どちらかといえばうまい方」と回答した者は、A群では約半数の47.6%であるのに対して、B群では12.2%にとどまっている。他方、技能レベルが下位となる「どちらかといえばへたな方」、あるいは「へたな方」と回答した者はB群で87.8%に及んでおり、B群ではA群に比べて技能レベルの低い者が多くなっている。離脱者に技能レベルの低い者が多いことから考えて、クラブを離脱する要因に本人の技能レベルの低さが関係しているように思われる。

表8 技能レベル (%)

項目	分類	A	B	合計
うまい方		13.7	6.1	13.0
どちらかといえばうまい方		33.9	6.1	31.6
どちらかといえばへたな方		38.2	49.0	39.2
へたな方		14.2	38.8	16.2

p<0.001

(5) 活動参加の目標

どのような目標をもってスポーツクラブの活動に参加しているか尋ねると表9のような結果となった。全体では、「いろいろな技術を身につける」ことを目標にしている者が最も多く36.7%、これに次いで、「選手(レギュラー)になる」ことをあげた者が32.6%となっている。いろいろな技術を身につけ、選手になり、活躍したいという子どもの思いがよく表れているといえよう。

A群、B群を比較すると、A群ではB群より「いろいろな技術を身につける」ことや「大会や試合で

勝つ」ことを目標にしている者が多くなっている。他方、B群ではA群に比べて「健康や体力をつける」ことや「みんなとなかよく活動する」ことを目標にしている者が多くなっている。このようにスポーツクラブで継続的に活動している者は、技術を身につけ試合で勝つという、勝利追求の考えをもつ者が多く、離脱者では健康や体力の増進やみんなとなかよく活動することなどを目標とし、勝利追求の姿勢は弱い。

表9 参加の目標 M.A. (%)

項目	分類	A	B	合計
いろいろな技術を身につける		38.3	18.8	36.7
選手(レギュラー)になる		32.8	29.2	32.6
健康や体力をつける		29.9	43.8	31.0
スポーツを楽しむ		24.5	27.1	24.7
みんなとなかよく活動する		21.0	27.1	21.5
大会や試合で勝つ		21.2	8.3	20.1
精神をきたえる		9.7	4.2	9.2
礼儀やマナーを身につける		4.7	6.3	4.9

(6) 指導者の目標

加入しているスポーツクラブの指導者は、どのようなことを一番の目標にして指導をしているかという質問に対して、表10のような回答を得た。全体としてみると、「大会や試合で勝たせる」ことを目標にしていると思う者が26.5%を占めて最も多くなっている。これに次いで、これとほぼ同じ程度となる25.0%の者が「いろいろな技術を身につけさせる」ことを目標にしていると思うと答えている。子どもたちが日頃の活動の中で感じている指導者の指導目標は、大会や試合で勝たせるということであり、また、大会や試合での勝利につながっていく、いろいろな技術を身につけさせることであるという認識をもっているといえよう。

A群では、ここにみられる指導者の勝利・技術追求の目標と、先述した子どもの活動参加の目標、すなわち、いろいろな技術を身につけ、選手になるという目標の間に、志向のうえでの大きなずれはないように思われる。しかし、B群では、子どもの活動参加の目標において多くの者があげている、健康や体力をつけることやみんなとなかよく活動することは、指導者の目標としてはほとんどあげられておらず、子どもの目標と子どもが感じている指導者の目標との間に大きなずれがあるといえよう。

スポーツクラブへの継続的な加入者は、大会や試合での勝利を目指したり、いろいろな技術を身につけさせることを目標とした指導者のもとで、いろいろな技術を身につけ、選手になり、大会や試合で勝つことなどを目標として活動している傾向が強く、スポーツクラブからの離脱者は、継続者と同様な勝利志向をもった指導者のもとで、指導者の目標とは異なる、みんなとなかよく活動することやスポーツを楽しむことを目標として活動していた者が多かったといえよう。

表10 指導者の目標 (%)

項目	分類		
	A	B	合計
大会や試合で勝たせる	26.5	26.5	26.5
いろいろな技術を身につけさせる	25.2	22.4	25.0
礼儀やマナーを身につけさせる	19.5	8.2	18.6
精神的に成長させる	10.9	14.3	11.2
スポーツの楽しさを味わわせる	6.2	16.3	7.1
健康や体力をつけさせる	6.8	4.1	6.5
みんなでなかよく活動させる	2.8	0.0	2.6
その他	2.1	8.2	2.5

p<0.05

(7) 加入してよかったこと

スポーツクラブに加入してよかったと思うことについてまとめると表11のようになる。全体では、「友達ができた」ことをあげる者が多く、50.9%を占めている。他の項目に比べて、この項目をよかったこととしてあげる者が多く、子どもたちの交友関係の形成にスポーツクラブの活動が寄与していることがわかる。これに次いで、「体が丈夫になった」こと、「スポーツがうまくなった」ことをあげる者が多い。

A群、B群を比較すると、ほとんどの項目において、よかったと思う者の割合はB群よりA群の方が高くなっている。特徴的なのは、「試合で勝てた」ことをよかったこととしてあげた者がA群では10.0%いるのに対して、B群では一人もいないということである。調査対象が1年生であるということもあり、試合への出場機会に恵まれない者が多かったということ、あるいは、試合が行われるシーズン前に離脱したことなどが、その原因として考えられるが、いずれにしろ、前述したように、B群の方が同学年のクラブ員の中で技術レベルが低いということが関係しているものと思われる。

また、B群ではA群に比べて、加入してよかった

と思うことが「特にない」という者がかなり多くなっており、離脱者ではスポーツクラブに加入してみたものの、これといった良さを感じることができずにやめてしまった者が少なからずいたということであろう。

表11 よかったこと M. A. (%)

項目	分類		
	A	B	合計
友達ができた	52.2	36.7	50.9
体が丈夫になった	32.7	22.4	31.9
スポーツがうまくなった	32.4	16.3	31.1
精神的に成長した	18.4	6.1	17.4
礼儀正しくなった	12.2	10.2	12.0
有意義な時間が過ごせた	10.9	8.2	10.7
試合で勝てた	10.0	0.0	9.2
ストレスの解消になった	4.9	6.1	5.0
その他	2.4	0.0	2.2
特にない	4.7	36.7	7.3

(8) 加入してよくなかったこと

スポーツクラブに加入してよくなかったと思うことについて示したものが表12である。「友達と遊べない」ことをあげる者が最も多く、35.9%を占めている。次に、「練習や試合で疲れる」ことをあげる者が23.7%、「クラブ内の人間関係で苦勞する」ことをあげる者が17.2%となっている。遊びを含めた、生活の諸側面における時間的余裕の消失に関係した事柄や、練習や試合など、活動の実施にともなう疲労に関する事柄、クラブ内の人間関係など、さまざまな事柄がよくなかったこととしてあげられている。

両群を比較すると、B群ではA群に比べて「練習や試合で疲れる」ことをあげる者や「クラブ内の人間関係で苦勞する」ことや「ストレスがたまると」ことをあげる者が多くなっている。離脱者では、活動による疲労に加えて、人間関係を含めたさまざまなストレスの蓄積を指摘する者が多く、彼らにとってスポーツクラブが居心地のよい場ではなかったことがうかがえる。これに対してA群では、スポーツクラブでの活動を肯定的に捉えているためか、よくなかったと思うことが「特にない」とする者が多くなっている。

表12 よくなかったこと M. A. (%)

項目	分類		
	A	B	合計
友達と遊べない	36.3	32.0	35.9
練習や試合で疲れる	22.0	42.0	23.7
クラブ内の人間関係で苦勞する	15.3	38.0	17.2
勉強する時間がなくなる	16.8	6.0	15.8
家族と過ごす時間がなくなる	10.1	10.0	10.1
ストレスがたまる	7.4	22.0	8.7
よくケガをする	7.1	2.0	6.6
学校の成績が下がる	3.9	6.0	4.1
その他	0.6	0.0	0.5
特にない	28.7	12.0	27.3

(9) 離脱の理由

中学入学後、スポーツクラブに加入したが、途中で離脱し、現在は加入していない者を対象に、その離脱の理由について尋ねたところ、表13のような結果となった。最も多いのは、「練習についていけなかったから」という理由であり、43.9%を占めている。これに次いで、「あまりおもしろくなかったから」という理由、さらに「他の部員・メンバーとうまくやれなかったから」という理由が多くなっている。これらに加え、「指導者とうまくやれなかったから」という理由、「練習や試合で疲れるから」という理由、「友達と遊べなくなったから」という理由などが多くなっている。

これらのことから、離脱者は、既述したように技術レベルが低い傾向にあることとも関係して、技術的に、あるいは、身体的にも練習についていけなかったり、疲れてしまって、スポーツクラブをやめることになってしまった、ということが推測される。さらに、技術レベルが低く、練習にもついていけないから活動におもしろさを感じることもできない。活動におもしろさ、楽しさを見出せないのでやめてしまう。このような構図が浮かび上がってくる。さらに、技術の向上や勝利を志向するクラブの雰囲気の中で、他の部員・メンバーや指導者とうまくやれないという人間関係における疎外感を味わい、クラブをやめてしまうということなどが考えられる。

表13 やめた理由 M. A. (%)

項目	分類	
	A	B
練習についていけなかったから	43.9	
あまりおもしろくなかったから	39.0	
他の部員・メンバーとうまくやれなかったから	36.6	
勉強に力を入れようと思ったから	22.0	
練習や試合で疲れるから	19.5	
指導者(顧問教師・監督など)とうまくやれなかったから	19.5	
友達と遊べなくなったから	19.5	
学校の成績が下がったから	9.8	
けがをしたから	7.3	
他にやりたいことができたから	7.3	
友達がやめたから	4.9	
選手(レギュラー)になれそうになかったから	2.4	
親にやめるようにいわれたから	2.4	
その他	9.8	

3. 小学校期のスポーツ実施状況

以下では、中学校期におけるスポーツクラブへの加入状況と小学校期のスポーツ実施状況との関係について検討していく。

(1) スポーツ意識

小学校期のスポーツ実施状況について検討するに先立ち、小学校期における運動やスポーツの実施に対する意識について考察しておく。

表14は、小学校の頃の、運動やスポーツをすることに対する意識について示したものである。全体では過半数の53.3%の者が運動やスポーツをすることが「好き」だったと答えている。これに「どちらかといえば好き」だったという者を加えると78.4%に及び、全体の8割近くの者は運動やスポーツの実施に対して好意的な感情を抱いていたことになる。

各群を比較すると、A群では「好き」だったという者が多く、63.4%を占めている。A群において「嫌い」だったという者は4.2%にとどまっている。B群、C群ではA群に比べて「好き」だったという者は少なく、「嫌い」だったという者が多くなっている。

中学校において、継続的にスポーツクラブに加入して活動している者は、小学校の頃、運動やスポーツをすることが好きだった者が多く、中学校において途中でクラブを離脱した者の中には、小学校の頃、運動やスポーツをすることが「嫌い」だった者や「どちらかといえば嫌い」だった者が3割程度い

る。小学校の頃、運動やスポーツをすることがあまり好きではなかったにもかかわらず中学生になってスポーツクラブに加入し、活動してみたが、やはり続かなかったという者も少なからずいることがわかる。中学生になってスポーツクラブへの加入経験のない者は、継続的な加入者や離脱者に比べて、小学校の頃、運動やスポーツをすることが「嫌い」だった者や「どちらかといえば嫌い」だった者が多くなっている。

表14 運動やスポーツに対する意識 (小学校期) (%)

項目	分類	A	B	C	合計
好き		63.4	42.3	25.4	53.3
どちらかといえば好き		21.3	26.9	36.2	25.1
どちらかといえば嫌い		11.1	13.5	20.9	13.5
嫌い		4.2	17.3	17.5	8.1

p<0.001

(2) スポーツクラブへの加入

表15は、小学校期のスポーツクラブへの加入状況を示したものである。全体では45.6%の者が加入している。この値は先述した中学校期におけるスポーツクラブへの加入が70.6%であったのに比べて低い値となっている。

中学校期に継続的にスポーツクラブへ加入しているA群では、小学校期においてもスポーツクラブに継続的に加入していた者が54.5%を占めて最も多くなっている。しかし、小学校期にスポーツクラブへ加入した経験がない者も34.2%を占めており、中学生になって初めてスポーツクラブに加入する者も多いことがわかる。

A群とB群を比較すると、B群ではA群に比べて小学校期にスポーツクラブへ加入していた者は少なく、加入の経験のない者が多い傾向がうかがわれる。中学校期のクラブ離脱者では、中学生になって初めてスポーツクラブに加入したが、結局、やめてしまったという者が多いことがわかる。中学校期にスポーツクラブへの加入の経験がないC群では、小学校期においても、スポーツクラブへ加入した経験がない者が多いという傾向がみられる。

表15 加入状況 (小学校期) (%)

項目	分類	A	B	C	合計
加入していた		54.5	40.4	19.2	45.6
加入していたが途中でやめた		11.3	13.5	16.4	12.6
加入したことはない		34.2	46.1	64.4	41.8

p<0.001

(3) 活動日数

本項目以下では、中学校期におけるスポーツクラブへの加入状況と小学校期のスポーツクラブでの活動状況との関係について検討する。従って、小学校期にスポーツクラブへの加入経験がない者については、分析の対象となっていない。

表16は、小学校期に加入していたスポーツクラブの活動日数を示している。各群とも、週に3~4日の活動日数であった者が最も多くなっており、各群の間に顕著な差はみられない。小学校期のスポーツクラブの活動日数は週に3日ないし4日程度を中心に分布しており、中学校期のスポーツクラブへの加入と小学校期に加入していたスポーツクラブの活動日数との間には特に関連は認められなかった。

表16 活動日数 (小学校期) (%)

項目	分類	A	B	C	合計
週に1日		14.5	15.4	25.9	15.9
週に2日		11.7	15.4	16.7	12.5
週に3~4日		48.5	53.9	31.5	46.8
週に5~6日		15.3	11.5	14.8	15.0
毎日		10.0	3.8	11.1	9.8

n.s.

(4) 練習時間

小学校期に加入していたスポーツクラブの平日の練習時間は表17のようになる。いずれの群においても、「2時間以上3時間未満」および「2時間未満」と回答した者が多く、各群の間に差はほとんどみられない。中学生になってスポーツクラブへ加入した者、加入したが離脱した者、加入しなかった者のいずれにおいても、小学生のときに加入していたスポーツクラブの練習時間はほとんど同じであったことがわかる。

表17 練習時間 (小学校期) (%)

項目	分類			合計
	A	B	C	
2時間未満	39.1	38.5	42.1	39.5
2時間以上3時間未満	47.4	46.1	42.1	46.6
3時間以上	10.6	7.7	14.0	10.9
活動がない	2.9	7.7	1.8	3.0

n.s.

(5) 活動の楽しさ

小学校期に加入していたスポーツクラブでの活動の楽しさについて尋ねると、表18のような結果になった。全体的にみると、「とても楽しかった」と回答する者や「まあ楽しかった」と回答する者が多く、多くの者が楽しさを感じながら活動に参加していたことがわかる。特にA群では、「とても楽しかった」と回答する者が57.0%を占めており、B群やC群に比べて著しく多い。これに対してB群やC群ではA群に比べて「あまり楽しくなかった」と回答する者や「楽しくなかった」と回答する者が多くなっている。

中学校期において継続してスポーツクラブの活動を実施している者では、小学生のときにスポーツクラブの活動において十分に楽しさを味わったとする者が多いという結果になった。中学校期においてスポーツクラブを離脱した者では、小学生のときにスポーツクラブであまり楽しさを感じることができなかったが、中学生になって、また、スポーツクラブに加入し、結局やめてしまったという者も比較的多い。

先述したように、中学校期のスポーツクラブへの加入状況と小学校期におけるスポーツクラブの活動日数や練習時間などの活動状況との間には、特に関連はみられなかったが、ここにみられるように、中学校期におけるスポーツクラブでの継続的な活動の実施には、小学校期におけるスポーツクラブでの楽しさの享受経験が関係しているといえよう。

表18 活動の楽しさ (小学校期) (%)

項目	分類			合計
	A	B	C	
とても楽しかった	57.0	26.9	35.6	52.4
まあ楽しかった	36.0	46.2	44.0	37.6
あまり楽しくなかった	3.9	23.1	15.3	6.6
楽しくなかった	3.1	3.8	5.1	3.4

p<0.001

(6) 技能レベル

小学校期に加入していたスポーツクラブでの技能レベルについて示したものが表19である。A群では、「うまい方」、あるいは「どちらかといえばうまい方」であったと回答する者がB群、C群に比べて多く、両方で6割を占めている。これに対して、B群およびC群では「どちらかといえばへたな方」あるいは「へたな方」であったと回答する者が多く、A群とB・C群では技能レベルに違いがあるように見受けられる。特にC群では、「どちらかといえばへたな方」および「へたな方」を合わせると63.2%に及び、B群に比べても技能レベルが低い傾向にある。

中学校期に継続的にスポーツクラブで活動をしている者は、小学校期のスポーツクラブで技能レベルが高かった者が多く、技能レベルが低かった者は中学校期にスポーツクラブに加入しなかったり、加入しても離脱してしまう者が比較的多いといえよう。

表19 技能レベル (小学校期) (%)

項目	分類			合計
	A	B	C	
うまい方	21.3	16.0	10.5	19.6
どちらかといえばうまい方	38.7	28.0	26.3	36.4
どちらかといえばへたな方	30.5	36.0	43.9	32.6
へたな方	9.5	20.0	19.3	11.4

p<0.05

(7) 加入してよかったこと

小学校のときにスポーツクラブに加入してよかったと思うのはどんなことかという質問に対して、表20のような回答を得た。各群のいずれにおいても、最も多いのは「友達ができた」ことである。中学校期におけるスポーツクラブへの加入者においても、加入してよかったと思うこととして友達ができたことをあげる者が多かったことから考えて、スポーツクラブへの加入は、子どもの友人関係を築いていく上で大きな意味をもっているといえるだろう。A群において二番目にあげられているのは、「スポーツがうまくなった」ことである。この「スポーツがうまくなった」ことをあげた者は、A群では40.2%、B群では15.4%、C群では11.9%であり、A群がB群、C群を大きく上回っている。このように、中学校期における継続者では、小学校のときにスポーツがうまくなったことをよかったこととして意識している者が、離脱者や非加入者より多くなっている。

また、「スポーツの楽しさが味わえた」ことをよ

かったこととしてあげた者は、B群では26.9%、A群では24.0%であるのに対して、C群では15.3%となっており、中学校期におけるスポーツクラブへの非加入者では、小学校期にスポーツの楽しさを味わうことができなかつた者が多いことが推察される。

さらに、A群では、加入してよかったと思うことが「特にない」という者が5.6%にとどまっているのに対して、B群では23.1%、C群では28.8%にも及んでいる。中学校期にスポーツクラブに加入しなかつた者や加入してもやめてしまった者では、小学校期にスポーツクラブに加入していたにもかかわらず、そのメリットを感じる事ができなかつた者が多いことがうかがえる。

表20 よかったこと (小学校期) M. A. (%)

項目	分類	A	B	C	合計
友達ができ		43.9	46.2	32.2	42.4
スポーツがうまくなった		40.2	15.4	11.9	35.0
体が丈夫になった		36.0	23.1	30.5	34.5
スポーツの楽しさが味わえた		24.0	26.9	15.3	23.0
試合で勝てた		12.3	15.4	5.1	11.5
精神的に成長した		11.2	7.7	5.1	10.2
ストレスの解消になった		3.9	7.7	8.5	4.7
礼儀正しくなった		3.6	0.0	3.4	3.4
その他		0.6	3.8	8.5	1.8
特にない		5.6	23.1	28.8	9.7

(8) やめたいと思うこと

小学校のとき、加入していたスポーツクラブをやめたいと思うことがあったか尋ねると表21のような結果となった。A群では、やめたいと思ったことが「よくあった」と回答した者は6.0%にとどまり、やめたいと思ったことが「なかつた」と回答した者が47.0%を占めている。これに対して、B群やC群ではA群に比べて、やめたいと思ったことが「よくあった」と回答した者が多く、やめたいと思ったことが「なかつた」と回答した者は少なくなっている。特にB群では、やめたいと思ったことが「よくあった」と回答した者が40.0%を占めている。中学校期にスポーツクラブに入り継続して活動している者では、小学校のときに加入していたスポーツクラブをやめたいと思ったことがある者は少なく、中学校期のスポーツクラブからの離脱者では、小学校のときに加入していたスポーツクラブをやめたいと思ったことがある者が多いといえよう。中学校期の

離脱者では、小学校のときにスポーツクラブをやめたいと思うことが多かつたけれども、中学生になって、想いを新たにして、また、スポーツクラブに加入したが、結局やめてしまったという者がかなりの数に及んでいることがわかる。

表21 やめたいと思うこと (小学校期) (%)

項目	分類	A	B	C	合計
よくあった		6.0	40.0	24.6	10.3
ときどきあった		47.0	36.0	47.3	46.5
なかつた		47.0	24.0	28.1	43.2

p<0.001

IV 結 語

本研究では、中学生のスポーツクラブへの加入状況や、その活動状況、さらに、中学校期のスポーツクラブへの加入状況と小学校期のスポーツ実施との関係について検討してきた。その結果の概要は以下のようになる。

中学校期におけるスポーツクラブへの加入状況をスポーツクラブへの加入や離脱、あるいは非加入の状況がひとまず落ち着く入学後約半年が経過した時点においてみると、加入者は全体の約7割となっており、多数の者がスポーツクラブに加入して活動していることが明らかになった。しかし、入学後約半年が経過した時点において、入学後スポーツクラブに加入したにもかかわらず、すでに離脱していた者が全体の7%程度いた。

スポーツクラブへの加入状況については、女子より男子の方が積極的に加入している。女子は加入しない者が多く、加入しても離脱する者が多い傾向にある。

運動やスポーツについての意識についてみると、加入者では運動やスポーツをすることが好きだという者が多く、運動やスポーツの実施に対する好悪の感情がクラブ加入に大きな影響を与えている。離脱者では加入者に比べて運動やスポーツをすることがあまり好きではないという者が多く、このことが離脱の要因の一つになっているものと思われる。

また、スポーツをするうえで大切だと思うこととして、加入者では離脱者や非加入者に比べて勝つことをあげる者が多く、加入者の勝利追求を重視する傾向がうかがわれた。これに対して離脱者や非加入者では、楽しくやるのが大切であるとする傾向がみられた。

スポーツクラブへの加入の契機としては、離脱者では他者の誘いや勧めで加入した者が多く、自分の意志

で加入している者が多い加入者と違いをみせている。自分の意志で加入を決めることがスポーツクラブへの継続的な参加につながっているといえよう。

中学校期のスポーツクラブの活動は週5日以上、平日では2時間前後の練習時間となっている。離脱者では加入者に比べて、平日の練習時間が長い傾向にあり、練習による時間的負担や、それに伴う身体的負担も大きかったことが推測される。

技能レベルについてみると、加入者は離脱者より技能レベルが高く、活動参加の目標においても、加入者は種々の技術を身につけることを目標にしている者が多い。さらに、加入者では大会や試合で勝つことを活動参加の目標にしている者が多い。加入者では、技術を身につけ試合で勝つという、勝利追求の考えをもつ者が多く、離脱者では健康や体力の増進やみんなとなかよく活動することを目標とするなど、勝利追求の姿勢は弱い。

スポーツクラブへ加入してよかったことでは、友達ができたとあがる者が多く、子どもたちの交友関係の形成にスポーツクラブの活動が寄与していることが明らかになった。加入者ではスポーツがうまくなったことや試合で勝つたことをよかったこととしてあげる者が多く、技能向上や勝利追求の姿勢をうかがうことができる。

スポーツクラブへ加入してよくなかったことについては、離脱者では加入者に比べて、練習や試合で疲れるといった、活動による疲労に加え、人間関係を含めたさまざまなストレスの蓄積を指摘する者が多く、彼らにとってスポーツクラブがあまり居心地のよい場ではなかったことがうかがえる。このような事情も彼らの離脱に関係しているものと思われる。

小学校期のスポーツ実施状況についてみると、スポーツクラブへの加入者は45.6%であり、中学校期における加入者が70.6%であるのに比べて加入率は低い。中学校期におけるスポーツクラブへの加入者では、小学校の頃、運動やスポーツをすることが好きで、スポーツクラブに加入していた者が多い。中学校期における離脱者では、加入者に比べて、小学校の頃、運動やスポーツをすることが嫌いだった者が多く、中学生になってスポーツクラブに加入して活動してみたが、やはり続かなかつたという者が少なからずいることがわかった。小学校期の運動やスポーツに対する好悪感が中学校期のスポーツクラブの継続的実施

と関係していることがうかがわれる。

また、中学校期における加入者では小学校のときにスポーツクラブの活動において十分に楽しさを味わった者が多く、技能レベルも高かった者が多い。小学校時に技能レベルが低かった者は、中学生になってもスポーツクラブに加入しなかったり、加入しても離脱してしまう傾向がみられた。

以上のことから考えると、中学校期のスポーツクラブは、小学校期、あるいは中学校期における、いわばスポーツのエリートが活動する場となっている傾向がみられる。今後は、小学校期にスポーツクラブに加入したことがない者やスポーツを楽しむことを目的とした者も共存できるようなスポーツクラブづくりが求められることになろう。

参考文献

- 1) 藤田紀昭 (1992) 子どもの生活とスポーツ. 四国スポーツ研究会編 子どものスポーツ, その光と影—生涯スポーツに向けて—. 不味堂出版: 東京, pp.17-37
- 2) 藤原誠 (1997) 子どものスポーツに関する研究—スポーツクラブからの離脱を中心に—. 愛媛大学教育学部保健体育紀要 1: 21-34.
- 3) 藤原誠 (1998) 子どものスポーツに関する研究 (Ⅱ)—勝敗観とクラブ参加状況の関係について—. 愛媛大学教育学部保健体育紀要 2: 17-24.
- 4) 藤原誠 (2000) 子どものスポーツに関する研究 (Ⅲ)—クラブ参加状況と継続意志—. 愛媛大学教育学部保健体育紀要 3: 23-30.
- 5) 原瀬瑞夫 (1991) スポーツ少年のからだの実態. 城丸章夫・水内宏編 スポーツ部活はいま. 青木書店: 東京, pp.119-152.
- 6) 池田勝 他 (2001) スポーツ白書2010. SSF笹川スポーツ財団: 東京, pp.49-53.
- 7) 同上書 pp.54-55
- 8) 文部省 (2000) スポーツ振興基本計画. pp.1-14.
- 9) 武藤芳照 (1985) スポーツ少年の危機. 朝日新聞社: 東京, pp.85-106.
- 10) 内海和雄 (1987) がんばれスポーツ少年. 新日本出版社: 東京, pp.56-123.